林芙美子の南京視察旅行

陳　亜雪

はじめに

瀬戸内海に面した町・尾道の「文学のこみち」[1]には、林芙美子の『放浪記』の一節が刻まれた文学碑が並ぶ。

海が見えた。海が見える。五年振りに見る、尾道の海はなつかしい。汽車が尾道の海へさしかゝると、煤けた小さい町の屋根が提灯のように拡がって来る。赤い千光寺の塔が見える、山は爽やかな若葉だ。緑色の海、向こうにドックの赤い船が、帆柱と空に突きさしてゐる。私は涙があふれてゐた。

『放浪記』をはじめ、尾道を舞台とした短編「風琴と魚の町」など、放浪生活をもとに書かれた数々の作品を読むと、放浪者の林芙美子にとって約六年間も過ごした町・尾道は古里のようなものと言ってもよい。

さて、昨年、「生誕110年　林芙美子展」が尾道市立美術館で開催された[2]。林芙美子の生涯を豊富な資料によって紹介しており、充実した展覧会であった。旅行に関する写真や資料も多く、国内だけではなく、林芙美子は四十八年間の短い人生で十回も海外旅行を行っていた。

①昭和五年一月一日～二十五日……婦人毎日新聞社主催の婦人文化講演会の講師として台湾へ。
②昭和五年八月二十日～九月二十五日……『放浪記』の印税でハルビン、長春、奉天、撫順、大連、金州、三十里堡、青島、上海、南京、杭州、蘇州へ。
③昭和六年十一月～昭和七年六月……朝鮮、満州、シベリヤ経由で渡欧、主としてパリに滞在。
④昭和十一年十月……自費で満州、山海関、北平へ、スケッチ旅行中の夫手塚緑敏と北平で合流。
⑤昭和十二年十二月～昭和十三年一月……南京視察旅行。南京陥落に際し、「東京日日新聞」（現「毎日新聞」）の特派員として上海、南京へ。
⑥昭和十三年九月～十二月……「漢口一番乗り」[3]。内閣情報部「ペン部隊」の一員として上海、漢口へ。
⑦昭和十五年一月五日～二月三日……北満旅行。安東、長春、牡丹江、佳木斯、宝清、綏芬河などを回る。
⑧昭和十五年十一月……新居格、小林秀雄らとともに、朝鮮講演旅行。
⑨昭和十六年九月……満州国建国十周年に際し、銃後文芸奉公隊の一員として満州へ慰問講演旅行。
⑩昭和十七年十月～昭和十八年五月……南方徴用旅行。陸軍報道部の臨時徴用に応じ、仏印、シンガポール、ジャワ、ボルネオなどへ。

十回の海外旅行の中で、林芙美子は女性の従軍作家として三回も戦場へ赴いた。戦争と深く関わっている女流作家であるため、尾道の展覧会でも、彼女の従軍体験に関する資料は林芙美子という作家を紹介

する重要な資料として展示されていた。しかし、その中で、南京視察旅行（昭和十二、三年）に関しては、漢口従軍旅行（昭和十三年）や南方徴用旅行（昭和十七、十八年）と比べ、資料が少なく、従軍日程さえも明らかではなかった。

南京視察旅行は林芙美子の四回目の中国大陸旅行に当たり、初の従軍体験でもある。彼女は昭和五年の満州旅行記では「小心者の私は、戦争があんまり好きぢゃない」[4]と書き、昭和十一年の北支旅行記でも「私は、政治的なものは何も知らない。ほんとに女子供の一旅行者に過ぎない」[5]と記して、政治や戦争に対する自らの無関心を強調し続けていたが、この南京旅行記では、「私はつくづく批判をするよりもまづ、戦ひには勝たなければいけないと思つた。（中略）地球から戦争といふものがなくならないかぎり、国々は常に勝つ用意をしておかなければいけない」[6]と日本が戦争で勝たなければと声高く叫んでいた。また、南京視察が終わった八カ月後、彼女は再び戦場に赴き、より一層戦争に深入りしていった。そこで、南京視察は、「戦争協力作家」と言われてきた林芙美子の戦争との関わりを研究するための重要で不可欠な体験と言ってもよい。

しかし、意外なことに、日本では、南京視察の従軍記は、一部の漢口従軍記を扱う論文の中で従軍記を論じるための一資料として、あるいは、林芙美子と戦争との関わりを論じる際に一度目の従軍体験としては取り上げられるが、この時期の作品自体を考察した論文は、管見の限り極めて少ないようである[7]。中国でも、王劲松の「侵華文学中における「他者」と日本女作家の戦争観――林芙美子の「運命之旅」を例にして」[8]しかないようである。王劲松は論文において、中国語訳されたという林芙美子の小説「運命之旅」に描かれている、中国軍隊の行為を歪曲、あるいは中国人を醜悪化する言葉を抽出し分析することにより、「「運命之旅」という小説は歴史を歪曲した日本の国家主義の立場に立って描かれた、日本軍隊の野蛮で残虐な行為を隠すための嘘話である」と厳しく批判している[9]。

このような林芙美子の南京視察旅行に関する研究状況は、翌年の漢口従軍体験を描いた二つの従軍記（『戦線』と『北岸部隊』）の盛んな研究状況とは対照的である[10]。この理由としては、『戦線』と『北岸部隊』の当時の日本社会における影響力の大きさが研究者達の目をより強くひきつけたためか、あるいは南京視察旅行に関する資料は『戦線』、『北岸部隊』と比べて短いものが多く、大作だと考えられていない、といった可能性が考えられる。

本稿では、林芙美子の南京視察に関する従軍記や随筆などを総合的に読み、いったい南京視察旅行で林芙美子が何を見て何を感じていたか、何が林芙美子をその後再度日中戦争の戦場に赴かせたのかといった疑問を考えてみたい。また、林芙美子の南京視察当時の状況を探明するための新資料も紹介したい。

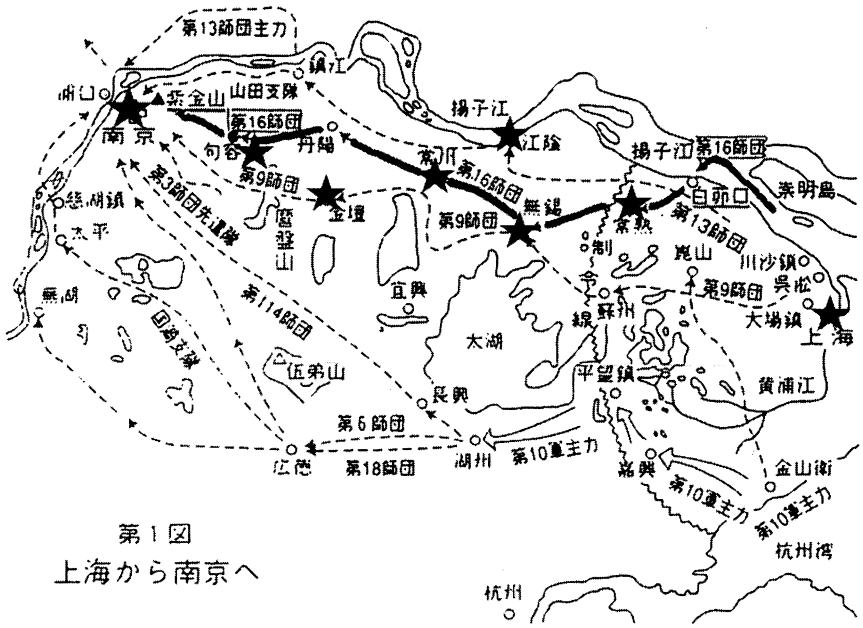
なお、本稿で扱う林芙美子の南京視察旅行を素材とした作品は以下の通りである。

・「女性の南京一番乗り」（「サンデー毎日」昭和十三年二月）
・「南京まで」（「主婦之友」昭和十三年三月）
・「私の従軍日記」（「婦人公論」昭和十三年三月）
・「黄鶴」（「改造」昭和十三年三月）
・『氷河』（竹村書房　昭和十三年三月）
・「静安寺路追憶」（『私の昆蟲記』改造社　昭和十三年七月）

一、南京視察の行程と南京での見聞

南京視察の行程について、高山京子は「南京視察」[11]において「その行程ははっきりしていない」と述べており、確かに、筆者が調べるかぎり詳しい資料は見つかっていない。文泉堂の全集の年譜でも「十二月、南京陥落に際し、「毎日新聞」の特派員となり、上海、南京へ赴いた」の一文に留まっている。しかし、旅行の行程を明らかにする

ことは林芙美子の南京視察当時の状況をよりよく理解するために、また、林芙美子の文章に記録されている情報と当時の南京の事実との整合性を判断するうえでも、非常に重要な情報だと考えられる。従って、林芙美子の南京視察旅行に関する作品に散見される情報と、当時の新聞記事を参照しながら、林芙美子の南京視察の行程を表1のように整理してみた。



第1図
上海から南京へ

図1．上海から南京へ

以下の図は『南京大屠杀資料集8』（張憲文　江蘇人民出版社、鳳凰出版社　平成十七年七月）による。林芙美子の上海から南京までの従軍路線を筆者が★印で示した。

表1．林芙美子の南京視察旅行の行程

昭和12年12月				昭和13年1月			
26日	27日	29日	30日	31日	1日（元旦）	2日	3日	4日
日華連絡船「上海丸」で神戸港から長崎へ向かう。大谷光瑞、谷正之（特命全権公使）、山本実彦（改造社社長）、土屋計左右（国際金融研究家）、甘濃みち子（上海居留民団長夫人）などと同行[12]。	長崎に着く。正午、長崎を出港、上海へ向かう。	昼過ぎに上海着。北海甯路にある「大毎新聞社支局」を尋ね、そこで「一原といふひと」が紹介された。彼と一緒に「領事館桟橋にある軍艦出雲」で「長谷川司令長官」と会う[13]。海軍武官室で、新聞班の「重村大尉」と会い、海軍の従軍章（一九五号）を貰う。	朝、大毎新聞社のトラックで上海から出発。真如、南翔、嘉定、太倉、常熟、無錫、江陰（露営地）、常州、金壇、句容経由で南京へ向かう。（図1「上海から南京まで」を参照）	夕方、南京到着 一泊目 当時民国財政部次長徐堪の邸宅に泊まる。佐藤振壽（毎日新聞社のカメラマン）と会う。	南京滞在 二泊目 朝、写真班の自動車に便乗し、南京見学。（玄武門、金陵大学農林試験所等）	南京滞在 三泊目 昼間　中華門、海軍の飛行場へ行く。黄昏　中山陵見学	南京を発つ。句容、金壇、江陰、常熟を経由。	夕方、上海に戻る。（一週間ぐらい上海滞在）

この図表からも明らかなように、林芙美子は昭和十二年十二月三十日に上海から出発し、真如、南翔、嘉定、太倉、常熟、無錫、江陰（露営地）、常州、金壇、句容を経由して、翌日の夕方に南京に到着した。彼女は南京で三十一日から翌年の一月二日までの三日ばかり滞在し、正月もそこで迎えた。南京に滞在していた三日間、南京はどんな様子だったのであろうか。特派員としての林芙美子は南京で何を見ていたのだろうか。それについて、林芙美子は以下のように述べている。

さすが玄武湖の元旦の景色はなごやかなものだ。来る道道、昨日まで馬や支那兵の死骸を見て来た眼には、全く幸福な景色である。立つてゐる歩哨の兵隊さんも生々してゐるし、街には避難民達がバクチクを鳴らしてゐる。バクチクの音は耳を破るやうにすさまじく鳴つてゐて、その音をきいてゐると、わつと笑声を挙げたいほど愉しかつた。（「女性の南京一番乗り」）（傍線は引用者による。以下同じ）

正月二日の日も、南京上空には敵機の空爆があつたさうだけれども、私は、日当りのいゝ徐堪の宿舎の二階で、故郷の友人達へ宛てゝ年始状を書いてゐる長閑さであつた。（「南京まで」）

「さすが玄武湖の元旦の景色はなごやかなものだ」、「全く幸福な景色である」、「わつと笑声を挙げたいほど愉しかつた」、「私は、日当りのいゝ徐堪の宿舎の二階で、故郷の友人達へ宛てゝ年始状を書いてゐる長閑さであつた」といった言葉を見ると、その時の南京はいかに平和であるものかと読者は思ってしまう。しかし、当時の歴史背景をよく考えると、林芙美子のこの描写はとても作為的であることに気づく。林芙美子が南京に到着したのは昭和十二年十二月三十一日である。周知のように、昭和十二年十二月十三日、つまり林芙美子が南京に到着する約二週間前、全世界を驚かせる歴史的大事件――南京大虐殺[14]が起こった。たったの二週間で南京市は本当に平和な状態に戻ったのか。日本兵は本当に南京市民に「バクチクを鳴らし」てまで歓迎されていたのか。

それに関する史料を見てみたい。例えば、南京大虐殺の重要な目撃者と言えるジョン・H・ラーベの日記[15]には、以下のような記述がある。

（昭和十二年十二月三十一日）

今日、うちの難民がふたり、外をぶらついていたところを日本兵に連れていかれて、略奪品を運ばせられた。昼、家にもどると、かみさんのひとりがひざまずいて訴えた。「お願いです！うちの人を連れ戻してください。でないと、殺されてしまいます！」みるも哀れな姿だった。

（昭和十三年一月一日）

夜の九時に日本兵がトラックに乗ってやってきて女を出せとわめいた。戸を開けれないでいたらいなくなった。見ていると中学校へむかった。ここはたえず日本兵におそわれている。私は庭の見張りをいっそう厳重にして、不審番に警笛を持たせた。

（昭和十三年一月二日）

本部の隣の家に日本兵が何人も押し入り、女の人たちが塀を越えてわれわれのところへ逃げてきた。

ラーベの日記から、難民たちが日本兵に「略奪品を運ばせられた」り、女が日本兵によって危害を加えられるという恐怖の中で生きていたことが分かる。また、ラーベだけではなく、当時南京の金陵女子文理学院で、女性を中心とした難民を保護し世話をしたアメリカ人宣教師ミ

ニー・ヴォートリンもまた、昭和十三年元旦の日記に「今夜は北里門橋の方角で大きな火災が発生している。略奪が続いているのだ。二、三日前に聖経師資培学校内で女性二七人が強姦されたが、それでも、強姦事件は減少してきていると思う」[16]と日本兵の暴行について記している。ラーベもヴォートリンも中国人（被害者）でもなく、日本人（加害者）でもない〈第三者〉であるため、これらの記述の信用度は高いと言えよう。こういった〈第三者〉の記述からは、当時の南京が決して林芙美子が描いたような「なごやか」で「幸福な」景色ではないということが明らかである。この点からみれば、林芙美子の南京視察従軍記を「報告としての価値はきわめて低い」[17]とした高山京子の評論は正しいと思われる。では、林芙美子の作為の理由は何であろうか。これについては、後節で詳しく分析する。

二、戦意高揚、兵隊賛美

日本兵の強さと尊さを賛美する言葉が多く書かれていることが、林芙美子の南京視察時の従軍記の大きな特徴である。「皇軍」を全体的に描写する時に、林芙美子は一人の従軍作家、しかも〈女〉の従軍作家という低い立場に立ち、下から「皇軍」を見上げる書き方をすることで、「皇軍」の強さと尊さを際立たせている。例えば、以下のような記述がある。

① 皇軍の働きは、これはもう全く神がゝりでせうか。一日もたゆみなく前進して行つてゐるのですが、私はこの行軍の勇ましい群を見てゐますと、地球の果てまでこのまゝ行つてしまふのではないかとさへ思つた位です。水も樹木もない荒蕪の土地を切り展いてずんずん進んでゆく、日本の兵隊の力は、全く吃驚してしまふのです。

（「私の従軍日記」）

② 私は南京への道々、皇軍の戦死者のある所へ、木片の小さい墓の建つてゐるのを見ましたけれど、私はこの木片の墓を見ると同時に、古くさい私だけの輪廻転生感は吹きとんでしまつて、トラックの上から何時までも此の英霊に帽子を振る気持でした。生きてゐる「人間」が、純朴な死にかたをする、これ以上の尊さはまづ他にありませんでせう。私はその原野に建てられてゐる皇軍戦死者の墓表を眺めて、この英霊に報いるには、千も萬も、ありがたうを云つただけでは足りないと思ひました。

（「静安寺路追憶」）

③ 夕方、私達のトラックは無錫と云ふ町に着いた。こゝは工場地帯で、戦争前はとても賑やかな所だつたさうである。こゝも全部全滅の有様。鞍上人なく鞍下馬なしとでも云ふのか、まるで、神様のやうに日本の兵隊は強いと思つた。（「南京まで」）

①では「皇軍」の行軍の勇ましさと速さが「全く神がゝり」のように感じられ、「地球の果てまでこのまゝ行つてしまふのではないか」と「私」は驚く。②では、戦死者の墓を見た「私」は、皇軍戦死者を「生きてゐる「人間」が、純朴な死にかたをする、これ以上の尊さはまづ他に」ないと感嘆し、皇軍戦死者の「英霊」に「千も萬も、ありがたうを云つただけでは足りない」と思う。③では戦争前に「とても賑やかな所」だった無錫が「全滅の有様」になったのを見て、何も残酷だとは思わず、却って日本兵を「まるで、神様のやうに」強いと賛美する。このように、①②③のいずれにおいても、日本の兵隊を神格化している。

また、一人一人の兵隊に対しては、林芙美子は「涙」や「胸が熱くな」るといった自らの身体の反応を描写することによって、側面から「兵隊さん」の「素朴さ」を際立たせている。例えば、南京の中山門をくぐった時に、警備している二三人の兵隊を見て、「私」は「なん

といふこともなく瞼の熱くなる気持」になる。また、常熟の辺りで水を探しに行く「兵隊さん」達の懐中電燈の灯を見て、「私」は「何と云ふこともなく胸が熱くな」る。また、伊勢出身のある「兵隊さん」が中山路のある家具屋でピアノを弾いていたのを見て、涙が溢れそうになった、という。

以上分析したように、日本軍全体に対しても、一人一人の兵隊に対しても、林芙美子は言葉を惜しまず、賛美するばかりである。しかし、林芙美子の筆に描かれている「神様」のような「兵隊さん」たちは、多くの史料によって明らかなように、実際には南京で中国兵だけでなく一般市民にまで、虐殺、略奪、性暴力等、暴戻極まる行為を行っていた[18]。前節で取り上げたラーベとヴォートリンの日記に記されている日本兵の姿と、林芙美子の描写とはあまりにも落差が大きい。林芙美子の南京視察について、川本三郎は『林芙美子の昭和』[19]において、林芙美子を「虐殺を知らない従軍記者」と言い、「十二月末に南京に入り正月を南京で過ごしただけなので、詳しい実情を知ることが出来なかったのは無理ないとは思うが、それにしても現在の視点で見ると、南京の街にいながら、林芙美子の目に、ほとんど戦争の現実が目に入らないのは奇異に思える」と述べる。正にその通りである。例えば、当時中央公論社の特派員として南京視察に行った石川達三は林芙美子の南京入城後の五日後である昭和十三年一月五日に南京を訪れた。彼は南京での見聞と兵隊たちから聴取した体験談をもとに「生きてゐる兵隊」[20]を書いたが、その中で、無防備な市民や女性を殺害する日本兵を描いている。そして、石川達三は昭和二十一年五月六日の「読売新聞」のインタービュー記事で、「入場式におくれて正月私が南京へ着いた時、街上は死体累々大変なものだった」と述べている。

僅か五日間で南京市内の風景が全く変わった可能性は極めて低い。林芙美子が日本兵の残虐な行為を全く知らなかったという可能性も極めて低い。もちろん、当時の軍部からの言論統制があったため書けなかった、あるいは自分に優しくしてくれた「兵隊さん」だから書きにくかった、といった可能性も考えられる。しかし、それにしても、こういった客観性の乏しい従軍記からは、当時の林芙美子が時局に妥協したと言わざるを得ない。少なくとも、軍部からの統制に対して、石川達三のような「あるがままの戦争の姿を知らせることによって、勝利に傲った銃後の人々に大きな反省を求めようとする」[21]勇気が出せなかったのである。しかし、本当に林芙美子は戦争の惨状を全く記すことはなかったのだろうか。以下、もう少し繊細に林芙美子の文章を解読していきたい。

三、無常観と戦争に対するネガティブな感情

冒頭で述べたように、南京視察は林芙美子の初の従軍体験である。初めて戦場に出て、初めて戦争の残虐な場面を目にした林芙美子はいったいどう感じたのか。「静安寺路追憶」を中心に、林芙美子が従軍期間に抱いた想いを見ていきたい。

まず、上海から南京まで百二十里あまりの従軍時の気持ちについて、林芙美子は以下のように述べる。

句容と云ふ所へ来るまでには、私は江陰と云ふところで露営をしたのですけれど、百二十里あまりの長い道々、私はこの戦場からほんたうに色々なことを学びました。その長い間の凝視は、いけないことに、私の感情を段々硬化させてしまひ、私を痴呆のやうな状態にしてしまふのです。

全く広い原野。日本のやうに優れた山の姿なぞ一つもない、荒涼とした大地が、まるで海のやうに無限に続いてゐるのです。色々な民族の血を吸つた広い大地なのです。私はその広い地に何となく反感を持つ気持でした。到るところ、色々なものが落ちてゐます。みな敵の落して行つたものばかりなのでせう、電線の切れたのや、戦車の残骸、ピカピカ落日に光つてゐる空缶、馬の死

骸、人間の死骸、脆いものへの私の硬化した反感は自分でも自分が分からない位冷酷なのです。（「静安寺路追憶」）

それから、南京に入城した後、南京市内を見学する時の気持ちを以下のように述べる。

私は南京では色々なところを自動車でまはりました。例の痴呆の状態で…。（「静安寺路追憶」）

私は南京といふ街は上海の閘北とか、大場鎮あたりのやうにめちゃめちゃなのかと考へてゐたけれど、こゝではどこへ爆弾を投げられたのか、家々は案外整然としてゐた。私はまるで痴呆の状態で街を歩いた。（「女性の南京一番乗り」）

中山陵も見に行きましたが、これはもう広大な山の宮殿と云つた感じです。ほんたうに私はこの旅に少し疲れたやうです。落日の大きく赤い色にもすべてが無意味に眼に写つて来るだけでした。（「静安寺路追憶」）

最後に、南京から上海に戻って、「静安寺路の平和鋪道を歩」く時に、以下のように述べる。

静安寺路の平和な鋪道を歩きながら、私は始めて無常観に似た感情が、少しづゝ私を支配しはじめて来たのに、私は温かいものを飲んだあとのやうに眼を細めるのです。誰だつたかはこの戦争を陣痛にたとへてゐましたけれども、ほんたうに長い陣痛だと思ひます。陣痛が長びくほど、妊婦もさらなり、はたの物も息苦しい感じでせう。（「静安寺路追憶」）

引用文が示すように、上海から南京まで百二十里あまり従軍する時に、残虐な戦場への「長い間の凝視」は、「私」の感情を「硬化」させ、「痴呆のような状態」にしてしまう。南京入城後、自動車でいろいろなところを回る時にも、「例の痴呆の状態」が続く。林芙美子は自分の当時の精神状態を「痴呆の状態」という言葉で表し、しかもそれを繰り返して強調している。では、なぜ林芙美子は「痴呆の状態」という言葉を選んだのであろうか。昭和に入ってから、「麻痺性痴呆」という病気の紹介及び治療法に関する本が多く出版されていた。例えば、昭和十二年前後には、『精神病に関するパンフレット』[22]、『小精神病学』[23]などが挙げられる。『精神病に関するパンフレット』において、「麻痺性痴呆」は「黴毒より起こる精神病」で、「感覚の障碍を来し、痛覚は鈍麻する」という身体的症状がある病気として紹介されている。『小精神病学』においては、「麻痺性痴呆」の「他覚的ニハ痛覚鈍麻或ハ脱失Analgesieヲ呈スルヲ見ル」という身体症状の外に、「道義心減退シ家族的愛情ヲ失ヒ、且ツ羞恥・不潔ノ感情失ハルルヲ以テ、其ノ日常ノ行動甚ダシク乱暴トナリ、全性格ノ変化ヲ見ル（中略）之レ一面ニ痛覚脱失アリテ苦痛ノ感覚ヲ欠如スルニ因ル」という精神症状も紹介されている。林芙美子は戦場において、感情が段々と硬化し、「電線の切れたのや、戦車の残骸、ピカピカ落日に光つてゐる空缶、馬の死骸、人間の死骸、脆いもの」を見ても、同情心どころか、「硬化した反感」しか持たない状態になっていると自身の状態を報告する。このような「痛覚の鈍麻」、「道義心の減退」という「症状」からみれば、「私」は「麻痺性痴呆」にかかっているのと同様ではないか。「私」が「痴呆」という〈病的状態〉になったのは、残虐な戦場を「長い間の凝視」したことによって衝撃を受けすぎたからにほかならない。林芙美子が自分の精神状態を「痴呆の状態」という〈病的状態〉である、と数回も強調するのは、戦場に出た自らの精神的苦しみを表したいのであろう。この精神的苦しみは間接的に戦争の残酷さを暗示していると言えよう。

ここでもう一つ注意したいのは、南京入城後の「私」が相変わらず、「痴呆の状態」になっていると記していることである。南京城内は「どこへ爆弾を投げられたのか、家々は案外整然としてゐた」のに、なぜ「馬の死骸、人間の死骸」などが数多く横たわっている従軍途中の精神状態と全く一緒なのだろうか。どう考えても矛盾していることがわかる。これは、従軍途中で見た「馬の死骸、人間の死骸」がたくさん横たわっている風景が南京城内にも続いていたために、「私」の「例の痴呆の状態」が続いたということに違いない。この矛盾は、前述したように林芙美子による南京についての描写が真実ではない、ということを裏付けているのではないか。林芙美子が書く時にこの矛盾に気づいていなかったのか、あるいは軍部の言論統制があったから事実は書けないけれども、わざと矛盾を書いて真実を仄めかしたのか、ということはここだけでは判断し難いので、まずは次の分析に行きたい。

「私」は、自らの脆いものへの「硬化した反感」を「自分でも自分が分からない位冷酷」だと批判する。中山陵にも行ったが、「旅に少し疲れたやう」で、「落日の大きく赤い色にもすべてが無意味に眼に写つて来るだけ」である。また、南京から上海に戻って、静安寺路の平和鋪道を歩く時に、段々「無常観に似た感情」に支配されはじめ、今回の戦争が「ほんたうに長い陣痛だと思ひます。陣痛が長びくほど、妊婦もさらなり、はたの物も息苦しい感じでせう。」と戦争に対するネガティブな感情を婉曲に表わしている。

林芙美子は戦争に対して、「わたしはつくづく批判をするよりもまづ、戦ひには勝たなければいけない」（「女性の南京一番乗り」）と声高く主張する一方、戦場に出た自らの〈病的状態〉、戦争に対するネガティブな感情をも描き出しているのである。

林芙美子は南京視察旅行から帰国した二か月後に、「黄鶴」という作品を発表した。この作品は林芙美子が南京視察旅行の経験に基づいて記した身辺小説で、林芙美子自身を思わせる主人公の重子が新聞社の特派員として南京視察に行った際の出来事が書かれている。家森善子は「林芙美子―戦争迎合作家の反戦感情」[24]において、林芙美子が戦中に発表した「あからさまな時局批判が書かれているもの」をいくつかを取り上げて、林芙美子と戦争との関係を洗い直すことを試みている。その中で、「黄鶴」も一つの重要な作品として取り上げている。家森善子は「黄鶴」における戦地の様子が「全体的に鈍調に描かれ、重子の心境も重苦しく語られている」ということに注目し、「陥落後の南京を見たことにより、芙美子の心の内に、戦争に対する疑問もしくはネガティブな感情が芽生えた」と結論付けている。確かに、家森善子が述べた通りである。従軍記やエッセイと比べ、書かれている内容はほぼ同じであるが、「黄鶴」に描かれている主人公の心境は圧倒的に暗く、主人公の戦争に対する疑問も書かれている。従軍記やエッセイ等と違って、小説はもともと虚構の物語として定義されているため、当時の林芙美子にとっては比較的に自分の本当の気持ちを言える媒体であったのであろう。軍部の言語統制に反さない限りにおいて、自分の本当の気持ちも表すことができたのは林芙美子の巧妙な所ではないか。

先ほどの「痴呆の状態」と南京城内の描写との矛盾の問題に戻ると、林芙美子が矛盾に気づいていないというよりは、軍部の言論統制があって事実は書けないが、わざと矛盾を書いて真実を仄めかそうとしている可能性は高いと言えよう。

四　中国の〈女〉への同情

「林芙美子」は、〈仲間〉である伊勢出身のある兵隊がピアノを弾くのを見るだけで涙が溢れそうになるにも関わらず、〈敵方〉である中国人に対しては、「冷酷」な視線を向けることが多い。例えば、「遠くまで空家ばかり」の南京城の荒涼とした風景を見ても、「私はづくづく批判をするよりもまづ、戦ひには勝たなければいけない」（「女性の南京一番乗り」）と思う。「纏足してひよろひよろ歩いてゐるお婆さ

んを見ても、敬礼をしてゆく子供を見ても、何だかいゝきびだと云つた気持」になる。蘇州の帰りに、ある「悪い道」を通る時に、「どこへ行つても水と泥そして青い服の支那人、これが支那の姿かもしれません。この大地に、どんな希望が埋まれてゐるのか、私には、この支那と云ふ国へは何度来ても解らない」と中国を蔑視しているような言葉を吐く。こういった例から、南京視察で、「林芙美子」が専ら冷酷な視線で中国を見ていることが分かる。しかし、そうは言っても、林芙美子の従軍記に「温かい」視線が全くないわけではない。例えば、林芙美子は従軍記において以下のように述べる。

①外面からは清潔さうに何でも白ペンキで塗りつぶしてあるけれど、戸棚やひきだしをあけると、さゝくれた木の目が出てゐて、おがくづ臭くて什方がないのだ。こんな台所だつたら、東京の一寸した家に行けば、もつと清潔なのがあると、わたしは女の心づかひなんかみぢんもない支那人の家庭の台所をぢつと眺める気持だつた。この家が華やかだつた時は、この白い台所に料理人がゐて、こゝの奥さんはサンルームで爪を磨いてゐたのだらうと思ふ。

②寒い晩で星がものすごく光つてゐる。わたしは新来の客なのでまづ部屋のどこかに自分のベッドをつくらなければならない。小使のおぢいさんに懐中電灯をかりて二階へ部屋を探しに行き、可愛い女部屋をみつけたけれど、この部屋には先客がある様子なので、寒い二階の廊下にわたしはベッドをつくつた。寝床といつても骨のやうになつた鉄のベッドで、わたしは石油臭い毛布を二三枚トラックから持つて来て貰つてこゝへ横になつた。カアテンも何もないので、寝ながら枯れたポプラの梢や星空が澄みとほつてよく眺められる。サンルームのやうになつた広い廊下に花莫蓙が敷きつめてあり、小さい小卓には赤い造花や、アメリカ製の口紅が置いてあつた。令嬢の口紅なのか、若い奥さんの口紅なのかわたしは知らない。その小卓に洋灯をおいたまゝ私は暫く無量な気持だつた。

③翌る朝はよく陽が射して長閑な元日だつた。かさゝぎといふ鳥がよく啼いてゐる。私は寝てゐる廊下いつぱいよく陽が射しこんで来る。温い日射しを眺めてゐると、ここで幸福に暮してゐた家族のひとたちを思ひ浮かべてみる。（「女性の南京一番乗り」）

全て林芙美子が泊まった「宋子文[25]の一の番頭とも云うべき、財政部長の徐堪[26]と云ふ人の邸」（「南京まで」）についての描写である。決して長くはない「女性の南京一番乗り」という従軍記には、この戦争とはあまり関係していないように見える文章が長く書かれている。どこに泊まったのか、その家がどうなっていたかについての描写は、戦争の状況を銃後の国民に知らせることを目的とする従軍記の枠から外れているように思える。これも高山京子が林芙美子の南京視察従軍記を「単なる旅行記の域を出ておらず、かつ主観にたよった文章で、報告としての価値はきわめて低い」[27]と批判する一つの理由となっているのであろう。しかし、よく内容を見ると、どうも林芙美子が敢えてこういった「身辺雑事」を書いたのではないかと推察される。

林芙美子は上海から出発し、毎日新聞社のトラックに乗って、昭和十二年三十一日に南京に着いた。当時、徐堪の邸宅は毎日新聞社の南京支局になっていたため、林芙美子はここに宿泊した[28]。①では、この邸宅の台所が「清潔さうに何でも白ペンキで塗りつぶしてある」が、実際に「戸棚やひきだしをあけると、さゝくれた木の目が出てゐて、おがくづ臭くて什方がない」のを見て、「私」は「女の心づかひなんかみぢんもない」支那人を批判する。林芙美子はこのような「臭くて什方がない」台所で料理を作らなければならない支那の女をかわいそうだと思ったのであろう。

また、この台所を見て、「私」は「この家が華やかだつた時」に、ここの「奥さん」が「サンルームで爪を磨いてゐたのだらう」と想像する。②では、「私」は邸宅の二階へ自分の寝る部屋を探しに行く時

に、「可愛い女部屋」を見つけたので、この家に娘が住んでいたことが分かったらしい。邸宅の廊下に「花莫蓙が敷きつめてあり、小さい小卓には赤い造花や、アメリカ製の口紅が置いてあった」のを見て、「令嬢の口紅なのか、若い奥さんの口紅なのか私は知らないが」、「その小卓に洋灯をおいたまゝ」、「私」は「暫く感無量な気持」になる。以前この邸宅の「小さい小卓」で、口紅で化粧していたのに、戦争のせいで自分の家を離れざるを得なかった「令嬢」と「奥さん」を思ったのであろう。③では、「よく陽が射して長閑な元日」の朝、「私」は「温い日射しを眺めてゐると、ここで幸福に暮してゐた家族のひとたちを思ひ浮かべてみる」という。林芙美子が「幸福に暮してゐた」ということを強調したのは、「幸福」に暮していた人たち、特に〈女〉達を故郷から背を向けさせた戦争の残酷さを描き出そうとしているのではないか。「台所」や、「可愛い女部屋」、「口紅」への描写からも、戦争の被害者である〈女〉達への林芙美子の同情が窺えるだろう。ここで注意したいのは、林芙美子が同情を示している〈女〉達は〈敵国〉中国の〈女〉達である。戦時下の林芙美子は中国という国を全体的に〈敵〉という位置に置いているが、中国の〈女〉達に関しては〈仲間〉と見做している。少なくとも〈敵〉としては見ていない。これは、林芙美子自身も〈女〉であるためであろう。

図2.「除堪の家の前で」
「南京まで」(「主婦之友」昭和十三年三月)より引用。

五、男性従軍記者の「神経衰弱」

前節で引用したように、林芙美子は邸宅で自分の部屋を探しに行く時に、「可愛い女部屋をみつけたけれど、この部屋には先客がある様子なので、寒い二階の廊下にわたしはベッドをつくつた」と書いている。そのことについて林芙美子は「静安寺路追憶」においてさらに詳しく書いている。

花模様の壁紙を張つた可愛い部屋には、水色の蒲団のかゝつた寝台があり、丸い卓上には色々な荷物が置いてありました。私はもう嬉しくなつて、此の部屋を当分借りようときめたのですけれど、ここにはもう先客があつて、その先客は、此の部屋に対する不思議な思慕の情の為に、切角だけれど私に借すことが出来ないと断りにいらつしたのです。

「貴女は、若い新聞記者の、このやうな戦地においての神経衰弱といふことをお考へになりませんか?—私は始め北支に行き、蒙古境の包頭を振り出しにして、たうとうこの南京まで来てしまつたのです。そして、偶然にこの美しい部屋をみつけて、この部屋の主の写真を私は手にしたのです……」

さう云つて、その若い記者のMさんは眼もさめるやうな美しい女の写真を私に見せてくれながら、病的かも知れないけれど、自分はこの写真に激しい愛慕の気持を持つて、恋々と今日まであの部屋にゐるのだと云ふ話なのです。—私はこの美しい邸宅を誰の家ですかと尋ねました。Mさんは、財政部次長の徐堪と云ふ人の家だと教えてくれました。(「静安寺路追憶」)

引用文が示すように、その「先客」は「若い記者」であり、彼はこの「可愛い女部屋」に対して「不思議な思慕の情」を持っている。彼にとって、この部屋は「戦地において神経衰弱」になっている自分を

癒してくれる存在であり、そして、部屋で見つけた「美しい女の写真」に「激しい愛慕の気持を持」っている。

論者の調査により、この「若い記者」を特定することができた。昭和十二年九月から十三年二月まで、毎日新聞の記者（カメラマン）として日中戦争の上海・南京戦線に従軍取材に行っていた佐藤振壽である。佐藤の「従軍とは歩くこと　上海・南京　見て撮った」[29]の「寒かった慰霊祭」の中に、以下の記述がある。（傍線と番号は引用者による）。

各自が好みの部屋を占領した。①私は十七、八歳の娘さんのものだったと思われる部屋を選んだ。四周をピンクの壁紙で貼られた部屋は、殺伐とした戦場に三ヶ月を過ごして来た私にとって心なごむ心地がした。

②部屋の持ち主の身の回り品は、すっかり持ち去られていた。後で聞いたところによると、国民政府財政部次長、徐漢[30]氏の住宅だったそうだ。そんなことから、南京からの退去も手早かったのではなかったかと考えられた。しかし、持ち出すのを忘れたのか、ダークグリーンのビロード地にバラの花を染め込んだ、派手な中国服が一着だけ残されていた。

（中略）十二月二十日、陥落から一週間も過ぎたせいか、上海派遣軍司令官・朝香宮中将が光華門の戦跡を視察された。南京城一番乗りでその名を高めた、第九師団の脇坂部隊が、宮様隷下の部隊である。崩れた城門の下で、当時の戦況を聞かれる場面を撮った。御下問に答える将兵の顔には、軍司令官が宮様ということで、緊張がみなぎっていた。

③この頃、上海から高名な作家たちが来たりした。その中に紅一点、林芙美子女史がいた。林女史はきさくなうえに、一ヶ月以上日本女性を見なかったわれわれにとっては、そのあでやかな姿はまぶしかった。

高級住宅を宿舎にしていたが、問題の〝水〟は女史にとっても不自由のようだった。誰もその現場を見た者はいなかったが、記者の一人が前庭のポプラの木に原稿用紙を張り付けた。

いわく「林芙美子女史脱糞の地」。

林女史は南京から帰国すると、従軍の印象を単行本『氷河』[31]の中に、「黄鶴」という題名で書いていた。

そのあとがき。

「私は正直に云へば、こうした素描習作の時代からぐんと大きく転換したいと念じてをります。私は転廻の気持を強くおこさせたものは、今度の戦争が強く原因してをりますけれど、私は先日南京まで行き、つぶさに戦場の跡をみて何だか人生感がはっきりした気持になりました。暫くは口も利けないほど呆んやりしてをりましたが、とにかく、巻頭の「黄鶴」という作品を書いてみました。」

④林芙美子女史は上海から毎日新聞の幌つきのトラックに乗って上海戦の古戦場を通り抜け江陰で一泊。翌日は常州、金壇、句容を過ぎて、夕方南京へ着いてわれわれの宿舎に入ったのである。

図3[32]

彼女は、南京は「乾いたやうな退屈な街におもった。南京の新開地のやうな広い道路を見ると（これが本当の南京かしら）と、がっかりした気持だった。」と書いていた。

長い引用であるが、佐藤振壽は南京に滞在中、①「十七、八歳の娘さんのものだったと思われる」「四周をピンクの壁紙で貼られた」部屋に、「殺伐とした戦場に三ヶ月を過ごして来た」心が癒やされたこと、②その部屋が「国民政府財政部次長」の邸宅だったこと、③南京で林芙美子と会ったこと、④林芙美子の上海から南京までの従軍路線についての記述及び林芙美子が自分たちの宿舎に入ったことを記している。これらの記述から、林芙美子の従軍記に書かれている「可愛い女部屋」に愛慕を持っていた「先客」とは佐藤振壽であることが断定できる。また佐藤振壽は林芙美子を「紅一点」と呼び、「林女史はきさくなうえに、一ヶ月以上日本女性を見なかったわれわれにとっては、そのあでやかな姿はまぶしかった。」とも述べており、南京陥落後に入城した初めての日本人女性が林芙美子であった史実と合致している。林芙美子の上海から南京までの路線に関する記述も、林芙美子の従軍記と全く一致している。従って、佐藤振壽の「従軍とは歩くこと　上海・南京　見て撮った」という作品は、林芙美子の南京視察を研究するうえで極めて重要な資料だと言えよう。

佐藤振壽は大正二年に東京で生まれた。昭和七年二月に、東京日日新聞（現・毎日新聞）に入社し、カメラマンとして写真部で勤務。昭和十二年九月から十三年二月まで従軍カメラマンとして、日中戦争下の上海・南京戦線を取材していた。「従軍とは歩くこと　上海・南京　見て撮った」は、彼が従軍取材中につけていた「従軍メモ」にもとづいて書かれた、一四五頁にわたる詳細な回想録である。その中には、当時の日本軍が中国の敗残兵に対して銃殺や刺殺を行っていた様子や、中国の女性の悲惨な姿などが書かれている。この資料は中国側の南京大虐殺事件に関する重要な資料『南京大虐殺史料集　第十冊　日本官兵と従軍記者の回想録』[33]にも収録され、南京の真実を語るとても貴重な史料となっている。ここで、「従軍とは歩くこと　上海・南京　見て撮った」における二つの場面を紹介する。

①「八十八営庭の中国兵〝処断〟」

右の穴の日本兵は中国軍の小銃を使っていた。中国兵を穴の縁にひざまずかせて、後頭部に銃口を当てて引き金を引く。発射と同時にまるで軽業でもやっているように、一回転して穴の底へ死体となって落ちていった。

左の穴は上半身を裸にし、着剣した銃を構えた日本兵が「ツギッ！」と声をかけて、座っている敗残兵を引き立てて歩かせ、穴に近づくと「エイッ！」という気合いのかかった大声を発し、やにわに背中を突き刺した。中国兵はその勢いで穴の中へ落下する。

たまたま穴の方へ歩かせられていた一人の中国兵が、いきなり向きを変えて全力疾走で逃走を試みた。気づいた日本兵は、素早く小銃を構えて射殺したが、筆者から一メートルも離れていない後方からの射撃だったので銃弾が耳もとをかすめ、危険このうえもない一瞬だった。

銃殺や刺殺を実行していた兵隊の顔はひきつり、常人の顔とは思えなかった。緊張の極に達していて、狂気の世界にいるようだった。戦場で敵を殺すのは、殺さなければ自分が殺されるという強制された条件下にあるが、無抵抗で武器を持たない人間を殺すには、自己の精神を狂気すれすれにまで高めないと、殺せないのだろう。

後で仲間にこの時のことを話すと、「カメラマンとしてどうして写真を撮らなかったか」と反問された。「写真を撮っていたら、恐らくこっちも殺されていたよ」と答えることしかできなかった。（P610-P611）

②「中国の女に泣きつかれる」

十二月十六日は晴天だった。社の車を使えたので、南京住民の姿をルポするために市内を走り回った。そして南京城外北東部にある玄武湖の風景写真を撮ったりした帰途、難民区近くを通りかかると、何やら人だかりがして騒々しい。そして大勢の中国の女が、私の乗った車に駆け寄って来た。車を止めると助手台の窓から身を車の中に乗り入れ、口々に何か懇願するような言葉を発しているが、中国語が判らないからその意味は理解できない。しかし、それらの言葉のトーンで何か助けを求めていることだけはわかった。

彼女たちの群れを避けて、中山路へ出ると多数の中国人が列をなしている。難民区の中にまぎれこみ一般市民と同じ服装していた敗残兵を連行しているという。憲兵に尋ねると、その数五、六千名だろうと答えたので、撮った写真の説明にその数を書いた。(P618)

佐藤振壽は①において、日本兵が中国の敗残兵を殺す残虐な場面を描いている。彼は「銃殺や刺殺を実行していた兵隊の顔」を「常人の顔とは思えなかった」と言い、「無抵抗で武器を持たない人間を殺すには、自己の精神を狂気すれすれにまで高めないと、殺せないのだろう。」と述べている。②において、「中国の女に泣きつかれる」というテーマが示すように、当時の中国の女性たちの惨めな様子を描いている。こういった記述から、佐藤振壽が、当時、日本兵の行為が残虐であり、中国の難民を可哀想だと思っていることが推測できる。

そして、佐藤振壽は、南京の真実を語る歴史の〈証人〉としてよりも、「百人斬り競争」の写真を撮ったカメラマンとして有名である。「百人斬り競争」とは、南京攻略戦に参加した向井敏明・野田毅両少尉が日本刀でどちらが早く百人を斬るかを競ったとされる行為である[34]。「百人斬り競争」の話は当時、「東京日日新聞」(一九三七年十一月三〇日、十二月四日、六日、一三日)と「大阪毎日新聞」(一二月一日、四日、七日、一三日)に四回にわたって連載され、大きな話題となっていた。佐藤振壽が昭和十二年十一月に撮った、向井、野田両少尉が刀を持って常州城門のそばに立っている写真が、昭和十二年十二月十三日の『東京日日新聞』に大きく掲載された。この写真は現在、中国南京大虐殺記念館に展示されている。

百人斬り超記録
向井106—105野田
両少尉さらに延長戰
「百人斬り競争」の両將校
市民は
遺失
少年二人
杉並原

『東京日日新聞』1937年12月13日

図4．東京日日新聞　昭和12年12月13日
『百人斬り競争と南京事件』(笠原十九司　大月書店平成二十年六月」)より引用

佐藤振壽は「事変下の大陸—従軍カメラマンがみた中国　私の写真を証拠に二人は処刑された」[35]において、自分の撮った写真が虐殺の証拠となって両少尉が銃殺されたことで遺族に「申し訳ない」気持ちであると述べており、当時、南京で何十万人も殺された大虐殺が行われた説に対しては賛成しがたいが、南京で敗残兵殺害など様々な残酷な場面を目撃したことは認めており、「戦争で亡くなった方々は本当に気の毒で、申し訳ない気持ちでいっぱいです」と述べている。戦後、

彼は従軍中に撮った写真を公開した。その中には、悲惨な中国人の姿が映っている写真も多い[36]。

このように、佐藤振壽は南京事件の重要な証人であり、従軍中、日本軍の残酷な行為を目撃した重要な証人である。彼が戦場において「神経衰弱」になったのは、戦場という「狂気の世界」の残酷さに堪えられなかったためであろう。

林芙美子の従軍記「女性の南京一番乗り」によると、南京滞在中、佐藤振壽は自分が戦地に来てから「神経衰弱」になったことを林芙美子に告白している。つまり、二人は比較的に深い交流を行っていた、と言える。佐藤振壽は第十六師団の大野部隊に従軍し、南京陥落の当日に既に南京城内に入った。林芙美子は彼より二週間ほど遅れて入城したから、直接には残酷な場面を見なかったか、或いは、有名な作家であったために南京での行動が制限され、残虐な場面を見せられなかったのだとしても、戦争の残酷さを見て「神経衰弱」にまでなった佐藤振壽から何かをそれについて聞いた可能性は高いであろう。

ここで、佐藤振壽が林芙美子について言及したもう一つの資料を紹介したい。彼は平成十七年に発表された「事変下の大陸—従軍カメラマンがみた中国　文化人たちが歩いた戦地」[37]において、以下のように述べる。

林芙美子さんには、南京陥落の直後の南京で出会いました。すでに多くの記者は上海や内地に帰ってしまっていて、社でも数人が残っているだけでした。林さんは私たちを迎えにきた東日のトラックに乗って、上海から一泊二日かけて入ったようです。同じ宿舎に滞在していましたが、久々にあった日本女性ですから眩しかったですね。ある記者が構いたくて、宿舎の庭にあったポプラの木に、冗談で「林芙美子女史脱糞の地」なんていう張り紙をしてました（笑）。本人も見つけて「新聞社の人は、すぐからかうから嫌だわ」と笑ってました。気さくな人でしたよ。

林さんとは同じトラックで上海に戻りました。私が共同租界によく遊びに行っていたからか、林さんに「フランス租界に行きたい」と頼まれて、同行したこともありました。

この資料では、南京から上海に戻る時に、林芙美子と佐藤振壽は同じトラックに乗り、上海に着いた後も一緒にフランス租界に行った、という新しい情報が提示されている。そして、彼は文章の最後に林芙美子の写真を一枚載せており[38]、「陥落後の上海・フランス租界でフランス兵を取材する林芙美子。後は住民申請に殺到する中国人（12年12月）」という説明がついている。この写真は佐藤振壽が林芙美子と一緒にフランス租界に行った時に撮った写真だと思われる。しかし、佐藤振壽と一緒にフランス租界に行ったことについて、林芙美子は一切書いていない。もちろん、戦地での出来事を全部書くわけにもいかないが、少なくとも、林芙美子が南京従軍体験を書く時に、意識的に材料の取捨を行っていることが分かる。

ここで、彼女は従軍記者が「神経衰弱」になったというエピソードを短い期間で三回も（昭和十三年二月に「女性の南京一番乗り」、三月に「黄鶴」、七月に「静安寺路追憶」）書いたことに注目したい。特に、「黄鶴」において、佐藤振壽を思わせる「清水君」の気持ちを本人に語らせる形で詳しく描いている。

僕にはどうしても、あの部屋に心が残って……僕は南京はこれで二度目ですが、あの部屋の為にわざわざこゝへ来たやうなものですよ。—一種の神経衰弱なんですね。新聞記者の神経衰弱ですよ。人にこんな話をしても、一笑に付して莫迦にするだらうから誰にも話をしないンですがね、僕は始め、蒙古境の包頭へやられて、そこで三ヶ月間働いてゐましたが、何だか、砂の波のやうな茫漠とした処にはふり出されていると、胃袋まで乾いて来るやうな、淋しい気持ちになつて来るンです。——やつと三ヶ月経つて北支

から上海へ行くやうに社命を受けたンですけど、上海からまた南京に来て、僕が始めて兵隊について南京へ入城した時、この家のあの部屋を私はみつけたンですよ。笑はないで下さい……あの部屋を発見した時はまだ、あそこの部屋の押入れのなかには、美しい女の衣裳が沢山かけてあつたし、壁には素晴らしく美しい女の写真が飾つてあつたもンで……僕の乾いたやうな気持ちは、この女の写真で急に蘇生するやうな愉しさになり、僕はもつとその女の写真はないかと、部屋のなかを探してみたンですよ……。すると、押入れの床の上に、海水浴場で撮つた写真が二三枚落ちてゐたンです。僕はもうそれからと云ふもの、何処を歩いてもその女が居やアしないかと、その女を探し求めるやうな気持ちでいつぱいでした。……（「黄鶴」）

残酷な戦場に出て、神経衰弱になった従軍記者が「可愛い女部屋」に心を残し、その部屋にあった美しく、「裸で立っているようにみえる」女の写真によって彼の「乾いたやうな気持ち」は「急に蘇生するやうな愉しさに」なる。ここの「可愛い女部屋」は戦場という非日常の世界と切り離された日常のある〈空間〉である。「神経衰弱」になった従軍記者はこの〈空間〉によって、心が癒されるのである。

「黄鶴」において、「（重子は）清水君の恋情はよくよくのものだと可憐な気持ちだつた。」の一文がある。ここから、林芙美子が神経衰弱になった佐藤振壽の気持ちに対して、理解する立場に立っていることが分かる。上述したように、林芙美子は自分が戦場に出た状態を「痴呆」のような〈病的状態〉だと述べている。そして、戦場で会った従軍記者の「神経衰弱」を幾度も繰り返して書いている。このように、戦場に出ている人達の〈病的状態〉、精神的問題を書くことによって、林芙美子は当時の戦争の残酷さを仄めかしているのではないだろうか。

おわりに

林芙美子は従来「戦争協力作家」として規定されてきた。本論文で分析を行ってきた南京視察旅行は、彼女の戦争協力の「第一歩」として見なされてきている。確かに、彼女は従軍記やエッセイなどにおいて南京大虐殺後の南京の真実を書かず、それを無視し、間違った情報を銃後の日本国民に伝えていた。加えて、彼女の作品には、「わたしはつくづく批判をするよりもまづ、戦ひには勝たなければいけない」（「女性の南京一番乗り」）といった軍隊や国民の士気を高昂させる言葉、日本の侵略戦争を美化し、兵隊を賛美する言葉が多く飾られている。こういった点のみからみれば、彼女は従軍作家として、軍部の「期待」に応え、戦争協力の役割を果たしたと言えよう。

しかし、林芙美子の南京での従軍体験を書いた作品には、戦場に出た自らの「無常観」も描かれており、「誰だったかはこの戦争を陣痛にたとへてゐましたけれども、ほんたうに長い陣痛だと思ひます。陣痛が長びくほど、妊婦もさらなり、はたの物も息苦しい感じでせう。」（「静安寺路追憶」）といった、戦争に対するネガティブな感情も表されている。そして、戦場に出た自らの精神状態を「痴呆状態」という〈病的状態〉だと強調し、戦争に出た自らの精神的苦しみを表現している。特に、徐堪の邸宅で出会った佐藤振壽の「神経衰弱」のエピソードを繰り返し描くことによって、戦争の残酷さと当時の南京の真実を仄めかしてみせた。

現在では、当時軍部による言論統制が厳しく行われていたことが明らかになっている。軍部の政策に反して、直接戦争の残酷さを書くことは難しかったと考えられる。石川達三のような「あるがままの戦争の姿を知らせ」ようとする正直な作家もいたが、作品が発表された即日に発禁処分を受け、石川達三本人も新聞法を犯した罪名で禁固四ヶ月、執行猶予三年の判決を下された。当時言論統制がどれほど厳しく行われていたかが窺える。言論の自由のない当時の状況では、林芙美

子は直接事実を書けなかったのであろう。石川達三と比べ、林芙美子は時局に負けたと言わざるを得ないが、戦場に出た人たちの病的な精神状態を描くことによって、戦争の残酷さ及び当時の歴史事実を仄めかそうとしたことは、林芙美子なりの「知恵」だと言えるだろう。

林芙美子が南京視察従軍から帰国した二か月後に記した、「重子は髪を梳きつけながら、また苦しい気持ちに責められるのであつた。この束縛されてゐる気持ちは、いつたい自分のような人種はどんな風に感じて仕事をして行つていゝのかと思ひ、国を愛してゐる為の苦しさなのだと、嘗てなかたつた悲哀が、重子の心を重たくした」（「黄鶴」）という一文は興味深い。「どんな風に感じて仕事をして行つていゝのか」、「国を愛してゐる為の苦しさなのだ」といった言葉からは、戦場に出て、残酷な戦争を眼前にした林芙美子の苦しみと、従軍作家としてどのように目の前の戦争をとらえ、どう書くべきかという逡巡が窺えよう。

「黄鶴」が収録された単行本『氷河』の後書きにおいて、林芙美子は「私は先日南京まで行き、つぶさに戦城の跡を見て何だか人生感がはつきりした気持になりました。暫くは口も利けないほど呆んやりしてをりましたが、とにかく、巻頭の「黄鶴」と云ふ作品を書いてみました。十年も経つたならば、何だか、無茶苦茶に黄鶴のやうなものを現在書いてみたかつたのです」と戦場から帰った後の自分の「呆んやりし」た状態と、「黄鶴」を書きたかった強い気持ちを表している。上述したように、「黄鶴」には、林芙美子を思わせる主人公の従軍時の苦しい気持ちが色濃く描かれている。戦場に出て内心に溜めていた「苦しい気持ち」を解消するために、林芙美子は「黄鶴」を書いたのではないだろうか。

このように、南京視察の体験が林芙美子を苦しませたのならば、では、なぜ八カ月後、彼女は再び従軍作家として漢口に赴いたのか。いったい何が彼女を再び戦場に赴かせたのか。おそらく戦争の進展につれて、国民が抱いた戦争文学への期待や軍部による文学者に対する従軍の要請によるのだろう。ごく少数の作家を除いて、殆どの文学者は軍部の要請に応え、積極的に従軍しようとする姿勢を見せていた。林芙美子も当時の時代の流れに流された。『氷河』の後書には、「私には、もう、ものを書いてゆくと云ふよりほかの道は何も出来ません。私は、私のごみごみしたものを少しばかり整理して、苦しい仕事をこれからしやうとおもひます。」と述べている。当時の林芙美子には、国民の戦争文学への期待と軍部の要請に応え、「ものを書いてゆく」道しかなく、だからこそ、再び戦場へと赴いたのであろう。

さらに、南京視察が林芙美子に与えたのは苦しみだけではなかった。新聞などに「女性の南京一番乗り」として華やかに報道された栄光と、戦地での好待遇も、彼女が従軍した〈収穫〉だったのであり、林芙美子を再び戦場に赴かせた重要な理由となったであろう。

注

1 尾道にある千光寺山の山腹の「文学のこみち」には、林芙美子や志賀直哉、松尾芭蕉などの尾道ゆかりの文人たちの文学碑が並ぶ。

2 二〇一三年六月二十二日（土）から二〇一三年七月二十一日（日）にかけて、尾道市ゆかりの小説家、林芙美子の生誕110年を記念して開催された展覧会である。

3 漢口は中国湖北省にあった都市で、現在の武漢市の一部に当たる。昭和十三年、内閣情報部の誘いによって、漢口攻略に作家として参加。同年十月に、「陸のペン部隊での漢口一番乗りである」と「朝日新聞」が漢口攻略戦で林芙美子を位置づけた。

4 「哈爾賓散歩」（「改造」昭和五年十一月）

5 「北京紀行」（「改造」昭和十二年一月）

6 「女性の南京一番乗り」（「サンデー毎日」昭和十三年二月）

7 例えば、高山京子の「林芙美子の戦中と戦後」（「創価大学大学院紀要」二十三号　平成十四年二月）と「林芙美子と戦争」（『林芙美子とその時代』論創社　平成二十二年六月）が挙げられる。

8 「重慶大学学報（社会科学版）」平成二十年第十四巻第四号

9 王劲松は、中国語訳された「運命之旅」の書誌について、「金戈訳「婦女雑誌」北京：婦女雑誌社　一九四三年（民国三十二年）4（10）」と記している。しかし、これに相当する林芙美子の作品は文泉堂の『林芙美子全集』にも『近代文学研究叢書　第六十九巻』（昭和女子大学近代文学研究室　昭和女子大学近代文化研究所　平成七年三月）にも入っていない。作品としてまだ確認できていない状態である。従って、この論文に関する論者の評価は保留し、紹介程度にとどまっている。※引用の日本語訳は論者による。

10 日本では、高山京子・金井景子・高良留美子・飯田祐子・荒井とみよ・菅聡子などの女性研究者たちがジェンダーの視点から論じ、高崎隆治・川本三郎・野村幸一郎などの男性研究者たちは林芙美子の漢口従軍時の史実や兵隊賛美の問題などについて論じることが多い。中国では、王向遠の「日本ペン部隊及びその侵華文学」（「北京社会科学」平成十年五月）や呉艶の「日本作家の侵華時期の「文学報告」――「国策文学」についての考察」（「日本問題研究」平成二十三年第四期）、劉立軍の「筆征：一種の侵略として――日本侵華戦争中の〝ペン部隊〟」（「当代社科視野」平成二十一年第三期）などが挙げられる。これらの論文はいずれも従軍記における「兵隊賛美」、「中国蔑視」といった、戦争を美化しようとする林芙美子の行為を批判している。

11 『林芙美子とその時代』（論創社　平成二十二年六月）

12 「お客満載の上海丸」（「朝日新聞」朝刊　昭和十二年十二月二十八日）

13 昭和十二年十月二十日から、長谷川清は支那方面艦隊司令長官兼第三艦隊司令長官を務めていたので、林芙美子が長谷川清と会ったと推測できる。

14 日中戦争中の昭和十二年（一九三七年）十二月、中国国民政府の首都南京を攻略する作戦で、日本軍が南京城およびその周辺でおこした虐殺事件。…日本軍は大量に発生した中国軍の捕虜を不法に殺害し、さらに婦女子をふくむ多数の一般民衆に対しても、掠奪、放火、強姦、虐殺などの残虐行為を行った。この事件は直ちに世界に伝えられて大きな問題となり、極東国際軍事裁判でも訴因の一つとされた。事件の被害者数は、正確に算定できないが、同裁判では二十万人以上、最近の中国側の公表では三十万人以上とされている。『国史大辞典　第十巻』（国史大辞典編集委員会　吉川弘文館　平成元年九月）による。

15 ドイツ人。当時ドイツ・シーメンス社の南京社長を務め、中国人救済のために奔走していた。引用文はすべて日本語訳『南京の真実』（平野郷子（訳者）講談社　平成十年二月）による。

16 『南京事件の日々：ミニー・ヴォートリンの日記』（ミニー・ヴォートリン著　岡田良之助、伊原陽子訳　大月書店　平成十一年十一月）

17 『林芙美子とその時代』（論創社　平成二十二年六月）

18 例えば、『南京大虐殺を記録した皇軍兵士たち』（小野賢二、藤原彰、本多勝一　大月書店　平成八年三月）、『南京事件――「虐殺」の構造　増補版』（秦郁彦　中央公論新社　平成十九年七月）、『南京事件七十周年国際シンポジウムの記録』（記録集編集委員会　日本評論社　平成二十一年二月）などが挙げられる。

19 新書館　平成十五年三月

20 「中央公論」戦時第二年の日本（特輯）昭和十三年三月。しかし、「反軍的内容をもった時局柄不穏当な作品」などとして、掲載誌は即日発売禁止の処分となる。その後、執筆者石川、編集者、発行者の三者は新聞紙法第四一条（安寧秩序紊乱）の容疑で起訴され、石川は禁固四か月、執行猶予三年の判決を受けた。

21 石川達三は「生きてゐる兵隊」（註20に同じ）の自序において、「原稿は昭和十三年二月一日から書きはじめて、紀元節の未明に脱稿した。その十日間は文字通り夜の目も寝ずに、眼のさめている間は机に座りつづけて三百三十枚を書き終わった。（中略）私として

は、あるがままの戦争の姿を知らせることによって、勝利に傲った銃後の人々に大きな反省を求めようとするつもりであった」と述べる。

22 渡邉石蔵　北越堂　昭和十年十二月

23 教科用簡明医学叢書第七輯　杉田直樹　昭和十二年四月

24 「国文目白」第四十五巻　平成十八年二月

25 中華民国の政治家、実業家。宋家三姉妹として知られる宋慶齢・宋靄齢・宋美齢とは兄弟である。大正十四年～昭和八年、中華民国の財政部長を務めていた。日中戦争勃発後、宋子文は対中支援を訴えるためアメリカに赴き、アメリカからの支援を取り付ける役を果たした。

26 徐堪（明治二十一年一月一日～昭和四十四年七月二十九日）は字可亭、中国四川省三台県の出身である。昭和十二年十二月に中華民国の財政部次長を務めていた。日中戦争の前に、南京の傅厚岡に住んでいたが、戦争が勃発した後、妻は子女を連れてアメリカへ定居したという。

27 同注17

28 徐堪の家の前に立っている林芙美子の写真と林芙美子の従軍記「南京まで」と一緒に昭和十三年三月号の「主婦之友」に掲載されている。写真があまり大きくないので、林芙美子の顔ははっきり見えないが、背景になっている徐堪の家がとても立派で、「英国風の家造り」であることが分かる。（図2「徐堪の家の前で」を参照）

29 『南京戦史資料集Ⅱ』（南京戦史編集委員会　偕行社　平成五年十二月）P625-629。

30 正しいのは林芙美子が言うように「徐堪」である。「堪」と「漢」は両方とも「かん」という発音があるので、佐藤振壽が聞き間違えたか、打ち間違えたかといった可能性が考えられる。

31 『氷河』（林芙美子　竹村書房　昭和十三年三月）

32 この次のページに、林芙美子を映っている写真一枚を載せている。写真の下に「南京陥落後、上海の共同租界へ多くの難民が流入した。中にはテロ分子も侵入するというので、それを防止するため、「申請住戸証照」を交付した。その受け付けに多くの中国人が殺到したので、整理のためフランス兵や日本兵も出勤。この時、林扶美子女史は、フランス租界の現場へ出かけて、フランス兵から何やら取材していた。（昭和13年1月）」という説明がある。

33 『南京大屠殺史料集　第十册　日軍官兵与随軍記者者回憶』（張憲文　江蘇人民出版社、鳳凰人民出版社　平成十八年一月）。書名の日本語訳は筆者による。『南京大虐殺史料集』シリーズは平成十六年から刊行されはじめ、全部で五十五冊からなっている。字数は二千八百万字以上に達している。日本側（加害者）、中国側（被害者）の資料の外に、アメリカやドイツ等（第三者）の資料も多く収録されている。

34 「百人斬り競争」の事実を巡る論争は現在でも続いており、それについては笠原十九司の『「百人斬り競争」と南京事件』（大月書店　平成二十年六月）に詳しい。

35 「事変下の大陸―従軍カメラマンがみた中国　私の写真を証拠に二人は処刑された」（佐藤振壽「諸君」三十七巻第五号　文芸春秋　平成十七年五月）

36 例えば、「事変下の大陸―従軍カメラマンがみた中国　戦場で出会った女性たち」（佐藤振壽「諸君」三十七巻第七号　文芸春秋　平成十七年七月）に杭州市内に撮った慰安婦の写真、「事変下の大陸―従軍カメラマンがみた中国　私の写真を証拠に二人は処刑された」に「中国兵と疑われた家族の解放を訴える女性」の写真を公開している。

37 「諸君」三十七巻第八号　文芸春秋　平成十七年八月

38 図3の『南京戦史資料集Ⅱ』（南京戦史編集委員会　偕行社　平成五年十二月）に掲載された写真に同じ。